

**JACET 中国・四国支部 & 松山大学大学院言語コミュニケーション研究科共催
平成 30 年度秋季研究大会プログラム&発表要旨**

日時：10月27日（土）12:30 ～ 受付

場所：松山大学（樋又キャンパス）

12:30 ～ 受 付

全体プログラム

12:50～13:00	開会式（H2A教室） 開会の辞	支部長 大会実行委員長 司会	岩井 千秋（広島市立大学） 寺嶋 健史（松山大学） 岩中 貴裕（山口学芸大学）
13:00～15:00	特別講演（H2A教室）（講演者：吉田 研作） 挨拶	松山大学言語コミュニケーション研究科長 司会	櫻井 啓一郎（松山大学） 寺嶋 健史（松山大学）
15:15～17:30	研究発表（H3AおよびH3B）		
17:35～	閉会式（H2A教室） 閉会の辞	開催校代表	瀧 由紀子（松山大学）

講演・研究発表プログラム

第1室（H2A教室）

特別講演：英語教育の将来を探る

（13:00 - 15:00）

吉田 研作（上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長）

第2室（H3A教室）

発表1：Some Suggestions for an Integrated University Language Curriculum

（15:15 - 15:45）

Laurence Dante, David Townsend（就実大学）

発表2：下位レベル学生の多読に向けての基礎語彙力習得について

— 語彙テスト結果の分析より —

（15:50 - 16:20）

三宅 美鈴, 山中 英理子, 遠藤 利昌（広島国際大学）

発表3：非言語コミュニケーションから読む『グレート・ギャツビー』

(16:25 - 16:55)

長瀬 恵美 (就実大学)

発表4：ティーチング・ポートフォリオとアカデミック・ポートフォリオの違いについて

(17:00 - 17:30)

中山 晃 (愛媛大学)

第3室 (H3B教室)

発表1：Cognitive and Brain Science, Psychology, and Experiential Learning Type Lesson Plans for Elementary School

(15:15 - 15:45)

Glenn Magee (愛媛大学)

発表2：中学校外国語科の「話すこと」における「やり取り」と「発表」に関する一考察
ー海外教科書に焦点を当ててー

(15:50 - 16:20)

房野 桃花 (安田女子大学)

発表3：Is There a Correlation Between English Proficiency, Motivation, and Output?

(16:25 - 16:55)

Douglas Parkin (山口学芸大学)

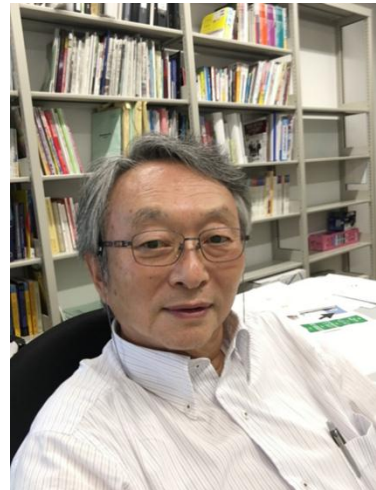
特別講演・研究発表 要旨

特別講演 (H2A 教室)

講師：吉田 研作（上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長）

講師略歴：

1948年京都市生まれ。上智大学，米国ミシガン大学で学ぶ。現職，上智大学特別招聘教授・言語教育研究センター長。元上智大学国際言語情報研究所所長，元上智大学外国語学部長，文科省「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」委員，大学入試センター「英語四技能実施企画部会」部長，「大学入試センター運営評議委員会委員」，「国土交通省航空英語能力証明審査会」会長，「NPO 小学校英語指導者認定協議会」会長，「Asia TEFL」Journal Advisory Board Member」など。



元 The International Research Foundation for English Language Education 理事，元 University of Delaware 客員教授，元 Georgetown University 客員研究員，元「英語教育の在り方に関する有識者会議」座長，元「外国語能力向上に関する検討会」座長，元「CAN DO リストによる学習到達度設定に関する検討会」座長，元「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会小学校部会」委員，元「中教審教育課程企画特別部会」委員，元「中教審高大接続システム改革会議」委員，元「中教審外国語ワーキンググループ」主査，元「英語の資格・検定試験とCEFRとの対応関係に関する作業部会」主査，元「東京都英語教育戦略会議」座長，など。その他，1969年から1972年文化放送でアポロ11号から15号の同時通訳。1988年から1993年までNHKテレビ英会話講師。交通文化賞受賞（国土交通大臣賞），Best of JALT 受賞，など。

講演タイトル：英語教育の将来を探る

講演概要：

2020年から新しい学習指導要領が始まることを踏まえて，今年度からその移行措置として，小学校から高校までそれぞれが試行錯誤をしながら新たな目標に応じた取り組みが行われています。

新学習指導要領では小学校高学年で外国語（英語）が正式な教科となり，従来の外国語活動が中学年にシフトします。中学校においては高校と同じように英語の授業は英語で行うことが求められ，高校では小・中で学んだ内容を基に，さらに高い言語活動の実施が求められます。その一方で，各校種や学年に応じた授業内容や評価方法，実施時間や教材の生かし方，教員研修のあり方，国語科との関連など，様々な課題が浮かび上がってきます。大学入試がどうなるのかについても大きな関心事の1つです。2020年度から大学入学共通テストが始まり，今までの聞く力と読む力だけでなく，書く力と話す力の技能を含む4技能を測ることができる民間の検定試験の利用に加え，各大学の入学試験の実施方法や内容にも大きな影響を与えようとしています。

今回の英語教育改革によって，日本の英語教育の何が変わり（何が変わらず），現在抱えている様々な問題をどのように解決されるのか（されないのか），各学校の教員はどのように対処し，子どもたちや社会にどのような影響を及ぼすのか。今後の日本の英語教育のゆくえを皆様と一緒に考えていけたらと思います。

研究発表

H3A 教室

発表 1 : Some Suggestions for an Integrated University Language Curriculum

The benefits of an integrated curriculum include the development of higher-order thinking skills, an increased amount of learner independence and a greater understanding of the importance of collaboration in education (Costley 2015, Malik and Malik 2011). However, many university English programs seem to be arbitrarily put together with limited cohesion among the various classes and little to no collaboration among teachers. As a result, students do not always get the best instruction possible. Moreover, the content covered in one class is often completely unrelated to subject matter in other classes. In other cases, however, the material is virtually identical, although student age and ability may be quite disparate. This presentation will detail the development and implementation of an integrated English-language curriculum in the English Department of a private Japanese university. Within this curriculum, integrated courses promote all four skills, set out clearly defined expectations for students and recycle language among classes as well as from one year to the next. Initially, the process whereby course goals were decided will be elucidated. Following this, the manner in which various considerations were amalgamated into an integrated curriculum will be explained, with emphasis on demonstrating how the classes are linked together. This explanation will include specific examples from the program.

発表 2 : 下位レベル学生の多読に向けての基礎語彙力習得について — 語彙テスト結果の分析より —

多読の効果は、語彙力や読解力が伸びたり、読むスピードが改善したり、また全般的な英語力を伸ばしたりするのに有効な手段であることはよく知られている。しかしながら、下位レベル学生を対象に実施したところ、その効果があまり感じられないとの報告が、複数の下位レベル担当者からあった。このことは、Haynes and Baker (1993) や Knight (1994) の研究で、多読による語彙習得に関して、初級者の英語力と語彙習得量には低い相関しか見られず、語彙力が上がるにつれ相関が高くなっていると報告されていることと一致している。多読による英語力向上を期待するのであれば、ある程度の語彙力が必要ということである。そこで、下位レベル学生がどのように単語を記憶しているのかを知るべく日本語でその単語の意味を書くという語彙テストを実施し、下位レベル学生のメンタルレキシコン（意味・スペル・文法）内の意味とスペルに焦点を当て、どのように単語知識を構築しているかを探ることにした。語彙テスト分析の結果、12項目の誤答に分類することができた。これらの誤答を詳細に分析した結果を踏まえ、効果的な多読に向けて必要な基礎語彙力育成指導法を提案したい。

発表 3 : 非言語コミュニケーションから読む『グレート・ギャツビー』

ギャツビーの悲劇は、不正な手段で財を成したうえで、自分の出自を偽り過去を取り戻そうとしたことに起因する。彼は、目指したありたい自分を演じるため、「言葉」によって自分を証明してみせようとしたが、それは叶わなかった。それはなぜか。彼の語る言葉は、自分では気づいていなかった言葉以外の要素—ジェスチャー、表情、仕草など—によってことごとく欺かれていたからだ。メラビアンの法則によれば、コミュニケーションにおいて言語情報が占める割合はわずか7%にすぎず、人間はコミュニケーションの9割以上を言語以外のものに頼っているという。この点に鑑みれば、いかに美しい言葉で飾り立てても、その人の本質がその言葉に表れるわけで

はないということになる。以上のことを踏まえた上でギャッツビーの人物像を捉えてみると、何が見えてくるだろうか。過去の恋人デイジーの心を再び自分に向けさせるため、大邸宅に住み、派手なパーティーを繰り返し、偽りの自己を演出しようとするギャッツビー。そこには上述のような矛盾が非言語的に表出してくる。即ち「隠すより表わす」のである（M.F.ヴァーガス 18）。これまで『グレート・ギャッツビー』について様々な議論がなされてきたが、コミュニケーション理論によってその悲劇を読むとる試みはなされてこなかった。本発表では、コミュニケーション理論—特に非言語コミュニケーションを中心に—に基づいた新たな読みを提案したい。

発表4：ティーチング・ポートフォリオとアカデミック・ポートフォリオの違いについて

FD 活動の一環として、「ティーチング・ポートフォリオ（教育業績記録）、以下 TP」や「アカデミック・ポートフォリオ（教育・研究業績記録）、以下 AP」を作成するワークショップがいくつかの大学や高専等で行われるようになってきた。TP とは、自らの教育理念や教育活動について振り返り再考することを目的とし、教育活動にかかわる書類等のエビデンスで裏付けされた記録のことであり、主に北米においては、教育内容を改善するツール、あるいは昇任・採用など人事評価に関わる資料として重要視されている（c.f., 栗田, 2012）。一方、AP とは、TP にさらに研究と貢献（学内・学外）を含めて、教育・研究・貢献がどのように結びついているのかを明瞭にまとめたものである。我が国においても、中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」（2008）において、大学に期待される取組の一つとして、積極的な導入が期待されているが、英語教育分野での TP・AP の導入事例や研究発表は多いとは言えない。そこで本発表では、TP と AP の目的や基本構造を簡易版の AP ワークシートの紹介を通して、TP もしくは AP 作成による英語教育研究上のメリットや今後の方向性などについて報告する。

H3B教室

発表1：Cognitive and Brain Science, Psychology, and Experiential Learning Type Lesson Plans for Elementary School

Traditional lesson planning sets the vocabulary of phrases that students use during class. Language is presented often through teacher-centered rote learning type practice drills and followed by one or two activities to practice the language. There is often little to no reinforcement of prior learning, nor a clear way of connecting prior learning to new language items. Magee (2018) found this to be the preferred method of planning classes for assistant language teachers (ALTs) because lessons could be planned and used with minimal stress. This raises an interesting mismatch between the government's aim to introduce experiential learning into the elementary school curriculum as a contrast to grammar translation English classes typical of junior and senior high schools throughout the country. One alternative is Content and Language Integrated Learning (CLIL), but to date, there have been few CLIL plans created and publicly shared for teachers. Among the available plans, most seem to use English as an addition to teaching a social studies type class using predominantly Japanese to explain and raise awareness (Adachi & Tsuchiya, 2018; Hasegawa, 2011) rather than English. This presentation will look at the challenges facing both types of planning based on findings from neuroscience and psychology and consider what both types of planning require to achieve the government's aim of children using English functionally through experiential activities.

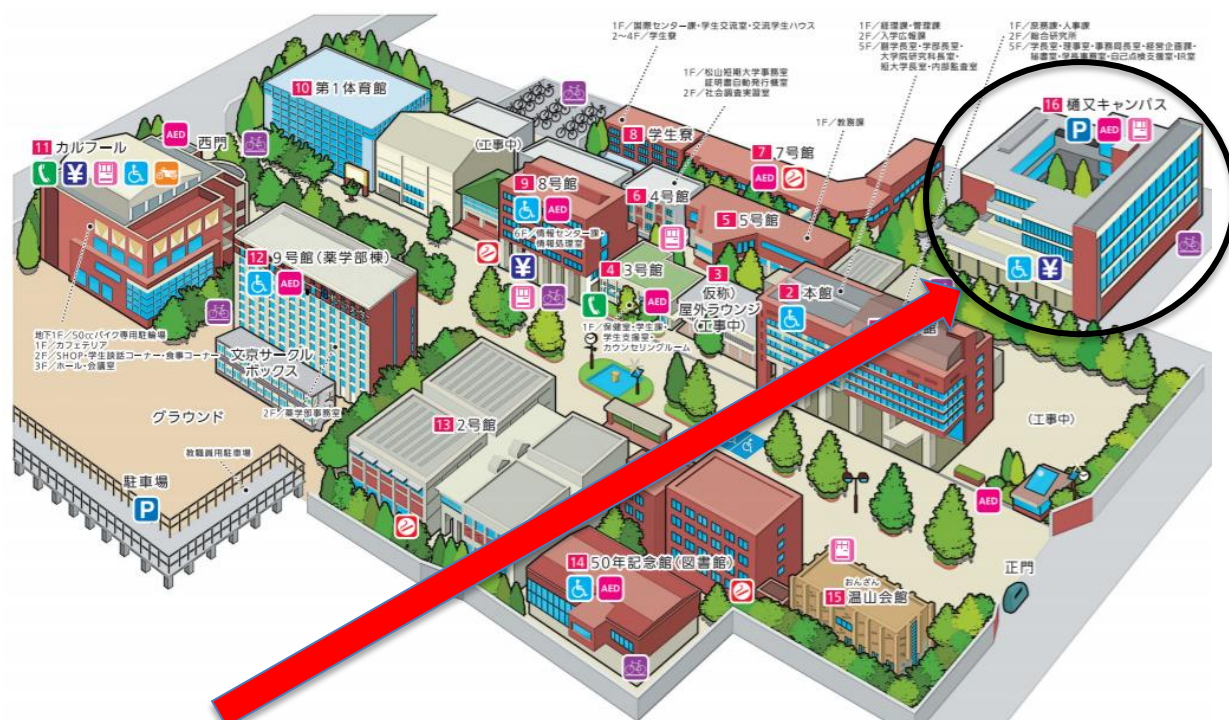
発表2：中学校外国語科の「話すこと」における「やり取り」と「発表」に関する一考察－海外教科書に焦点を当てて－

次期中学校学習指導要領が発表され、外国語科では、「話すこと」の活動が「やり取り」と「発表」に分けられた。「やり取り」と「発表」に分けられた理由の1つとして、言語活動の「話すこと」のうち、即興性が求められる「やり取り」の活動が現状で比較的行われていないという背景があった。房野(2017)では、先行研究を基に現行の中学校の英語検定教科書を用いて、「話すこと」の活動がどの程度行われているのかについて調査を行った。教科書は6社3学年分の計18冊を対象として、「話すこと」の活動を1) プラクティス, 2) やり取り, 3) 発表, 4) 発表からやり取りの活動, の4つの種類に分けて分析を行った。分析の結果、2) のやり取りの活動が他の活動に比べ少ないという結果が出た。前調査をふまえ、本調査では、CEFRに準拠した海外のspeakingに特化した英語教科書では、「やり取り」と「発表」の活動がどのように構成されているのか調べることを目的にして「話すこと」の活動の特徴を分析する。本調査で見られた海外の英語教科書の特徴と房野(2017)の分析結果を比較し、日本の中学校で「やり取り」と「発表」の指導を行う際の示唆について議論する。

発表3：Is There a Correlation Between English Proficiency, Motivation, and Output?

The purpose of this presentation is to see if there is a correlation between university students' English proficiency levels, their motivation, and the resulting output they produce. This study has been conducted using 4th year elementary education students in University and 1st year daycare education students in college. The courses used in this study are the Methods of English Language Education (英語科教育法(小)) and a similar course offered to college day care education students titled 英語コミュニケーション. The core hypothesis to this study is that English proficiency alone does not directly correlate to motivation, and then to output. This presentation is based on a case study of two similar yet unique courses offered to university and to college students. Given the unique differences of the courses, it may appear to many that there should be vast differences in output between college and university students. I will discuss variables which differ between the two courses with the main one being English proficiency levels. I will also discuss theories concerning motivation and output given the variables above. This presentation will provide quantitative and qualitative data which indicate variable factors are always needed to be considered when estimating output in an L2 setting. Finally, in conclusion this presentation will address how English proficiency may affect motivation and output, but it is not a universal indicator.

松山大学 文京・榎又キャンパス



榎又キャンパスはここです。

* 駐車スペースが限られておりますので、車でのお越しはご遠慮下さい。

◎松山大学アクセス方法

- ・ JR 松山駅 → 伊予鉄道市内線電車一番環状線（古町経由）→ 鉄炮町 → 松山大学
- ・ JR 松山駅から鉄炮町までは約 15 分です。鉄炮町から松山大学までは徒歩 5 分です。

懇親会について

注) 今回は懇親会を大会前日の 10 月 26 日（金）に実施しますのでご注意ください。懇親会には特別講演講師の吉田研作先生もご出席の予定です。懇親会申込は以下のフォームからお願いします。なお申込期間は 10 月 1 日から 10 月 12 日までです。

懇親会申込：<https://ws.formzu.net/fgen/S89320738/>

懇親会 場所：Japanese Dining への

〒790-0003 愛媛県松山市三番町 4 丁目 11-3（jp-nino.comkai）

TEL: 089-934-0200

時間：10 月 26 日（金）19:30 ～

費用：5,000 円